

北海道美術館のこと

本 田 明 二

今年も全道展がはなばなしく開かれる。毎年のことだが、会期が近づくと、会場造りの係りになった人は頭をいためる。壁面はできるだけ多く、通路はなるべくゆったりと、デパートの催場の限られたスペースのなかで、この矛盾した作業にとりくまなければならない壁面を多くとるということはできるだけ沢山の作品を並べたいということであり、通路をゆったりと、ということは、作品を観賞するに必要な距離がほしいということにほかならない。これはせまい会場でははじめから両立するものではないのだが、平面図にいろいろ線をひき、両者のギリギリの妥協点を見つける。しかし絵をならべてみると、絵と絵は、肩をつきあわせ朝の満員電車の混雑ぶりを思わせる。「うちの店で、この展覧会の会場がいちばん雑然としているね」などと、デパートの人に冷やかされるのも、もっともな話である。ひろびろとした会場がほしいものである。

美術館を造ろうという声は、戦前からあった。しかし、戦後北海道の美術はますます盛んになり、同時に美術館建設の声も高まり、昭和36年9月、北海道美術館建設期成会が結成され、その運動もようやく組織され、盛りあがってきた。しかしようやく今年の新年度予算に、美術館のための調査費が上提されながら、削られてしまったことは何とも残念でならない。この小間子の出るころ開かれる道議会で、何とか復活してもらいたいものである。

考えてみると、北海道開発の歴史は、もっぱら産業経済が重点であり、文化行政は無きにひとしかったといってもいいすぎではあるまい。

本道には、先住民族の残した、すぐれた美術遺産はもとより、物故した作家の遺作も沢山あるのだが、道民の目に触れる機会もすくなく、散逸のおそれある現実を考えると、これらの作品を収集保存し、陳常することも急がねばならない問題だろう。

昨年、本道出身のすぐれた物故作家の一人である三岸好太郎の遺作展がひらかれた。遺族である画家三岸節子氏は、好太郎の遺作こそ北海道に置くのが最もふさわしい、と道に寄贈を申しでられたのだが、道側は受け入れ態勢がととのわないまま、1年になろうとしている。この間、国立美術館（東京）、長岡近代美術館、愛知美術館（名古屋）等でこの作品をほしがっている。道側はこの作品の価値を認めないのだろうか、その消極的態度には疑問をもたざるを得ない。このような作品は散逸してしまったり、二度と集めることは不可能なことを銘記すべきである。これなど道の文化行政の消極性を単的にもの語っているのではないだろうか。さらにまた、開道百年を記念して、開拓功労者4人の大記念像が作られるそうだが、それさえも、たった一人の作家に制作を依頼するという無神経さには、おどろくほかはない。本道の出身者でこれらの銅像を作れる作家が他にいなとも思っているのだろうか。これらの例は少くとも、美術を愛し、関心をもつ人々にとって、不幸な、そして悲しむべき事件であった。

本道の総合開発は産業経済の成長とともに、知事のいわゆる「人づくり」が車の両輪になって進まなければならないし、そのために道民の豊かな情操をやしなう積極的文化行政の施行が根本の課題であろう。美術館の建設も早急に実現されるべきものの一つではないだろうか。

開道百年も間近になった。これを記念するモニューマンの一つとして、他国からくる人々にも誇りうる美術館を造ってもらいたいものだ。